

## 国を愛する——タジキスタン訪問記

織戸典子

夕食を食べながら聞いていたラジオニュースに「安部総理夫妻はタジキスタンの首都ドシャンベにおいて、千九百九十八年に殉職された秋野豊国連タジキスタン監視団政務官他国連職員顕彰プレートへの献花を行いました」と流れ、大陸の風景がよみがえった。

### タジキスタンへ

娘に会うために中央アジアの国タジキスタンを訪ねたのは二千八年五月二日からである。ウズベキスタン航空機で、タシケントまで十一時間余を過ごし、機中に二度の食事をしたが、青い空が続くばかりで夜が来ず空のシルクロードを西へ西へと太陽を追いかけていった。

### 国境

タジキスタンにいく直行便はない。ウズベキスタンのタシケント空港に降り、手続きに二時間ほどもかかって空港出口に行くと、娘の手配してくれた案内人の

ナイームさんが名札を持って待っていてくれた。ナイームさんの車で夜の国境を越えるのである。

ウズベキスタンからタジキスタンに入る国境は、首が痛くなるほど見上げねばならぬ鉄扉の上に有刺鉄線が巻き付けてあった。その前のうす暗がりの中に老人と荷車を引くロバがたたずんでいた。無影灯の下に機関銃を持った迷彩服のウズベキスタン兵たちがたむろしている。おしゃべりをしていたが、それでも背を見せることはなく手は機関銃にあてている。鉄扉の開閉をしている兵とナイームさんとは顔なじみらしく、ハグをしながら「ヤポン」と話し、パスポートを見せただけですんだ。ナイームさんだけが事務室にでかけしぼらしくして戻ってきた。

国境緩衝地帯は五十メートルである。中国から来た十屯トラックが検問を受けていた。荷調べのウズベキスタン兵は麻

葉探知犬のシェパードを連れてコンテナに入り、出てくると車体の下に潜らせタイヤのまわりを念入りに何周も嗅がせる。煙草を吸っている兵もいるほどのくだけた様子も見えるのに、うす闇の中での異様な緊張感に、隠して書いている短歌手帳の文字が乱れた。国境警備兵が住む古貨車が三百と犬の檻が並べて置いてあった。

北はウズベク南はタジクの国境線と鎌積むロバの行き来す

このあたりに住む人たちは長い歴史の中で国境を意識することなく暮らしてきたのである。今もなお朝には国境を越え他国にある自分の畑を耕し羊を追う。夕には収穫物をロバの引く荷車に乗せて家に帰っていく。

タジキスタンへの入口では迷彩服の背に機関銃を逆さに掛けた兵に「ウエルカム タジキスタン」と迎えられた。夜の国境はたいそう越えにくいと聞いていたが十分ほどで通過することができた。ナイームさんに現金を渡し、国境警備兵の長にも袖の下を出している様子がうか

がえた。

その夜はホジエンドの街のソグドホテルに泊まった。

### ドシャンベへ

ホジエンド空港から、二十四人乗り双発機のタジク航空国内線に乗り一時間ほどで首都ドシャンベ空港に着陸した。迎えに来てくれた娘の車で借家に向う途中、知人のホテルの前で駐車し、レジストラーツィア(滞在登録をせねばならないのだと二人のパスポートを持って出ていった。ソ連時代の制度の名残で入国した外国人を管理するための登録である。済ませておかないと、出国時や町なかで警官に審問されたときに面倒なことになるといふ。パスポートとスタンプを押しした小さな紙を持って戻ってきた。

### ヒツサール要塞

車で三十分ほどのヒツサール要塞にかけた。歴代の王や知事たちが住み、中には池や庭園・市場・キヤラバンサライなどがあった栄えていたというが、ソ連成立前の抵抗運動の根拠地となったためロシア赤軍に徹底的に破壊された。平原を区切るように囲む幅広い土盛は城壁の

名残である。今では観光客が歩き放牧された牛が草をはむ平原となつて、城門だけが修復されている。

### タジキスタン人が主権をもつていた時代はサマニ朝(八七四〜九九九)時代まで

以後は異民族に征服され続けた国である。運転手のガニーさんは、「観光地となつているウズベキスタンのサマルカンドとブハラはタジキスタン人が造つたものである。私たちの祖先が造つたものを横取りされた。だからウズベキスタンとは仲良くできない」といきどおり話す。

門前の樹齢五百年を超えるというプラタナスの巨木は「幸福の木」とよばれ、人々はこの樹に自分の衣服の端を切り取つて結び付け願い事をするのだそうだ。枝に結ばれたさまざまな色の布が揺れている景色は、壊された城や横取りされた街を思う人々のため息のようになびいていた。

### アジナ テパの遺跡

片道二百キロあまりの道路は穴だらけで頭や腕をぶつけないで行つた。タジキスタンの総面積の九十三パーセントはパミール山脈・天山山脈・アライ山脈からなる山岳地帯である。遠くに万年雪をた

たえた山脈を望みながら、赤いひなげしと黄の菜花のゆれる草原・丈低い草が生える赤茶けた土漠・雪解水の流れる溪谷を見ながら進む。

ロバの背にゆられ眠りて家路ゆく少女の籠に若草あふる

途中チル Chol Chayshuma(四十四の泉)に寄る。イスラム教の聖人が杖を突いた地に湧いた泉で、人生に五度訪れると幸運に恵まれると言われるオアシスである。あたりにはプロフ(油で炒めたピラフのようなもの)やシャシリク(串刺しの焼肉)、ナン(パン)などの露店がならんでいる。自炊をしている人たちもおり、家族連れでにぎわっていた。

高山の溶けた雪が何年か後に清水となつて顔を出し、上流から下流へと、飲食用・食器洗い用・水遊びプールと順に堰を造つて使われながら再び伏流水になつて地中に消えていく。小学生くらいの女の子たちが血洗いや配膳を手伝い、クルタ(タジキスタンの女性のゆるく長い上着のすそをゆらゆらさせているのはとてもか

わいい。

泉の中に倒れこんだ瘤だらけの巨木は、皮がむけずすべしした腎だけになって枝先に申し訳ほどの若葉をつけている。腰かけて写真を撮ってもらいながら木肌をなでていると、この桑が若木だったころ青々と繁った葉が蚕を養い絹糸を生んでいる情景がうかぶ。織物は駱駝の背に乗せられて大陸を横断し、海を渡って日本についた。その絹織物が大切に保存され、年に一度正倉院展で見せてもらう。こんなことを考えていると時空を超えた親しみが湧く。

アジナ テパはシルクロードにそった仏教寺院で七〜八世紀にはたいそう栄えていたそうだが、平原に変わってしまった。埼玉大学から発掘調査にきているという日本人青年二人に出会った。「昨日まで掘っていたのに残念でした。遺構はそのままにしておくで痛むので、日干しレンガで覆いその上に壁土をぬりました」と話してくださいました。崩れたままの僧院跡や、発掘改修し灰色の大きな土饅頭となつて並ぶ仏塔などの間を歩いてゆく。全長十三メートルの大涅槃仏と基壇や仏像が

たくさん出土している。

小さき両手につつま握手をしってくる  
魔寺遺跡のトルコ帽の子

大涅槃仏はドシャンベの国立民族博物館に展示してあるので後日拝観に行った。瓜実顔にひき目、口角をあげてほほ笑むアルカイックスマイルで右手を手枕にして眠っておられる。衣紋にかすかに朱を残し笑っていないがどこか悲しそうにも見える。足裏に仏足石で見たことのある輪廻の紋が入っていた。案内人のおぼさんは説明の前に合掌し、「私の国のたいせつな仏様です」と合掌して終えた。信仰をたずねたら「ムスリムです。イスラム教でも仏教でも、その土地その時代の人々が信じて守ってきたものなのだから、お互いに尊重しあわねばなりません」と話された。

### ヌレク湖方面へ

ガニーさんに運転してもらってヌレク湖方面にでかける。山裾を削っただけの道路は片側が山、もう片側が溪谷の濁流である。途中羊の大群が道いっぱい

がり進めない。羊たちは道端の草をはみ食み行く。群れの最後には旅の途上に生まれた黒い小羊がよろけながら付き、親羊はときどき立ち止まって乳を飲ませていく。付き添いの男たちはゆっくり歩きながら、はみ出した羊を細い棒で追っていく。先頭・中ほど・最後尾に付いているロバと馬の背の振り分け荷物の中に鍋があった。ロバはテントを積み、馬たちは体に括り付けられた物干し竿ほどもある狼よけの長棒をひきずりながら、路面に線を引いて進んで行く。犬と少年を含む三人の男たちは群れを連れ、あと五日ほど野宿しながらパミール高原まで行くのだという。

狼に襲われにくくと耳尻尾切られる大の羊追い行く

ヴァクシユ川にあるヌレクダムは堤防の高さが三百四メートルあり、既設のダムの中で世界一の高さを持つ。七千メートルを越える山岳地帯から水が流れ込んでいるヌレク湖にはあちらこちらに島のように浮かぶ山の名残が頭を出していた。

タジキスタンのどの地域でも、ピルの壁・道路脇の看板・レストランなどいたるところにラフモン大統領の肖像写真が掲げられている。大統領の出身地であるダングラの街を通ったとき、道路や街筋が他地域より良く整備されているような気がした。大統領は千九百九十四年に選出されてから現職であり、相当な独裁政治をしている様子がネットニュースに出ている。ガニーさんに「大統領は独裁的な政治をしているようですが」と言ったら「大統領は私欲を肥やしているところもあるが、内戦より良い。爆弾や銃撃におびえながら逃げまどったり、今日の飯を心配しなくてもいいのだから。わたしはこの国を愛している。やわらかい心をもつことが大切だ」と話された。

### ドシャンベ市内観光

娘は仕事なので、通訳兼ガイドは国立タジキスタン言語大学日本語学科五年生のフセインさんである。彼は「在日本国大使館主催の日本語弁論大会で三位になった。この日本語タジク語辞典を賞品にもらった」と嬉しそうに見せ、確かめながら丁寧に説明してくださった。

国立民族博物館を見学の後ルギータ通りを行き、大統領官邸近くのチャイハナラハトで昼食を食べた。ソ連時代は国営のレストランで、間仕切りがなく柱で支えた伝統的様式の白い二階建ての高級스러운店である。高い天井にはペルシャ絨毯のような模様が極彩色で描かれ、壁は幾何学模様の透かし彫りで風が吹き抜け心地よい。美人の若いウエイトレスが黙ってトンと注文の品を置いてゆく。

食事をしながら卒業したらどうするかと訊ねると、「タジキスタン言語大学日本語学科で教えます。給料は少ないけれど、私は、ラストサムライ秋野豊さんを尊敬しており、日本が大好きですから。いつか日本に行ってもっと日本語が上手になりたい」

「タジキスタンは内戦で道路も橋も電気や水道も壊され、ソ連時代よりもっと貧しい国になってしまいました。でもよい国です。わたしたちが頑張つて住みやすい国にしていきたい」と話していた。

ドシャンベ市内の歩道は街路樹の並木が続く。大路には乗り合いのミニバスとトロリーバスが走っている。ソモニ広場

に行く途中、若い女の子がポプラの樹の下に座り前に空き缶を置いている。野の花を摘み汚れた小さな手に持つて差し出す幼い男の子。知らぬふりをして通り過ぎててもまわりついて離れていかない。昨日は信号で止まった車の窓ガラスをたいて金をせがみ、ドアを開けかけた子もいた。物乞いである。内戦で多くの寡婦と五万人の孤児ができた。知らぬふりをするのは辛いけれど、一人にわたしたちらその後どうなるのだろうかともなくして足早に過ぎることしかできなかった。

真青な空から照りつける太陽に顔と手がジリジリ焦げる。広場の大温度計は三十六度をしめし、逆U字アーチの前に右手を高くかかげたソモニ像が両脇にライオン座像を従えて立っている。ソ連時代はレーニン広場と呼ばれレーニン像が立っていたが、独立したとき民族の象徴としてイスマイル・ソモニの像に建てなおしたと話す。ソモニはサマニ朝の最盛期を築いたタジク人の英雄である。

ゼリョーニバザールは人々が行きかい活気がある。野菜・果物・生活雑貨・肉・蜂蜜など、それぞれの区画が決まってお

り、品物が整然と積み上げられている。大柄なおじさんが小さな椅子に腰掛け、背を丸めて台の上にトマトを積み上げていく。玉ねぎ・ジャガイモなど丸くて不安定な物までもきちんと積み上げている。ナン売りのコーナーは肥ったおばさんばかりである。幾何学模様や花模様がついた大皿ほどのナンが積み上げられている。

サラダと漬物のコーナーがあり、キムチも売っている。プロフに入れる織切り人参など生野菜の山が雪崩をおこしている。この売場は朝鮮族の売子が多い。キルギスとウズベキスタンのバザールにも同じ区画があり、同じ品を売っていた。ソ連時代スターリンによって強制移住させられた人々の子孫である。少年が半畳ほどの二輪台車をあやつり人々の間を器用に通り返けていく。荷物運びをしていくばくかの金をもらっている。

売物の箒が歩いているごとく背負う少年華奢に小さし

野菜売場でトマトを見ていたら、垢じみたクルタにスカーフを被った浅黒い女

性がキャベツの前に停まりじつとこちらを見つめている。前布に赤ん坊をくるんで抱いている。無花果の前、干葡萄の前、蜂蜜の前とついてくる。抱かれた赤児は顔に蠅が止まっても掃うことをせず、瞬

きもしない。細いきゅうりを握る右手だけをかすかに動かしている。きつい陽射しの中を歩きつづけ、物乞いして生活している。声をかけることはせず、五歩後ろについてくるつつましく沈んだ姿が哀しい。自分は我慢して子に食べさせても満腹にしてやれぬきびしい生活は続いている。娘は、「赤児の五人に一人が栄養不良で乳児死亡率も高い」と話していた。

### カフタレウザル峠鷹の通り道峠へ

運転手付き四輪駆動車をかりて、秋野豊さんの狙撃されたカフタレウザル峠にむかう。首都ドシヤンベの東百八十キロの地点である。リングの白い花が盛りの中に基礎だけが残された廃屋が続く。内戦の爆撃にあい破壊された村落にはだれも戻っていない。道端に繁る青草の中にキャタピラの付いていない戦車が半身埋まっている。男が三人、錆びついた砲先をはずそうとしているので写真を撮ろう

と構えたら、「撮るな」と怒鳴られた。「一ヶ月前に通った時には戦車にキャタピラが付いていた。あの男たちは戦車を分解し鉄材として闇で中国に売っているのだらう」と運転手は話す。

タジキスタンは千九百九十一年九月にソ連から独立したが、地方主義的な対立がおこり内戦が始まった。九十二年からエモマリ・ラフモン氏の率いるタジキスタン共産党と、タジキスタン野党連合とが戦い、九十四年に停戦合意が成立した。九十七年六月には和平協定が交わされたが、完全な終戦にはならなかった。

山裾を切って通した道の片側は山、もう一方は雪解水のながれる溪谷が続く。

カフタレウザル峠にさしかかった時、運転手のジュラさんが、

「峠の頂上付近で少年が道の真ん中に出て車を止めた。ゲリラたちは止まった車を狙撃した。少年がかかわっていたことは、少年のためにもこの国のためにも悲しすぎるので秘密になっている」

「内戦は女・子ども・年寄り・羊・ロバ・馬など戦つてもいない者までも、みんなに辛く悲しい思いをさせた。道路だつ

てこんなに悪くはなかった。私も難民になつて、ウズベキスタンに逃げていた。戦争はしてはいけない。」とつぶやいた。

内戦がくすぶり続けているとき、国連は日本政府に専門家の派遣を求めた。外務省の要請に答えたのは、筑波大学の国際政治学者・秋野豊助教授だけであつた。この内戦を完全終結させるために、日本人政務官、秋野豊は国連タジキスタン監視団に参加した。出発前に友人には「今回は正直言つて不安です。日本政府に骨を拾つてもらふことになるかも知れませんが」と話している。

秋野はタジキスタン政府側からの交渉者である。言葉だけでは信じてもらえない。現地にてかけ人々と対話し、住民の家に立ち寄りつては、柔道で身につけた骨接ぎやマツサージ術で、老人の腰痛や子どもの骨折を治療した。捕虜交換の監視作業中に、イラン式レスリングをする兵から挑戦を受け、柔道で三人を勝ち抜いたこともある。兵士たちは秋野を抱き締め「お前はおれたちと同じムジーク（真の男）だ」とほめたたえた。時には共にサッカーをし、飲めない酒を酌み交わし

ながら、必ず安全と仕事を保障すると根気よく語りかけた。反政府勢力の指導者十人以上と交渉し、ダビルダラー地方の野戦司令官だつたミルズ・ジョエフ氏と会談し戻る途中、鷹の通り道峠の峰に待ちふせていたゲリラの若者に狙撃された。

車には軍事監視員の秋野豊・シェフチク少佐（ポーランド）・シャルベ少佐（ウルグアイ）・タジク人のマフラモフ通訳兼運転手の四人が乗っていた。秋野は車から飛び出し、捨て身で犯人たちに訴えたが、狙撃が止むことはなく、車は漁られたのち百五十メートルの崖を濁流に落とされた。秋野の体には二十八個の弾が入っていた。犯人三人は反政府勢力に捕まえられ、政府にひきわたされた。

九十八年七月二十日没、享年四十八歳。妻と二人の娘を日本に残しての逝去であつた。二年後内戦は完全に終結した。この内戦で死者は五万人、孤児も五万人でいて、今では全員がタジキスタンに戻っているが、二十五万人が難民となつて国外に逃れていた。

蹄跡残る崖路名の知らぬ青き花ゆるる

秋野はてし地

道路脇溪谷側を小高くし、周りを飾り金具で囲んだ敷地の中に扇型の慰霊碑が建てられている。タジキスタンを要として、↓日本・↓ポーランド・↓ウルグアイとそれぞれの国の方角が線示され、最上部にロシア語で「彼らはタジキスタンの平和のために命をささげた」と記されている。その前にそれぞれの名を記した四枚の菱形の石板が建てられていたそうだが、秋野ら三人のものではなく、右端の一枚を残すのみであつた。完全終戦から八年たつている。石板は風雨で倒れてなくなつたのだろうか、考えていたような戦後にはならず不満を持った人に抜き取られたのだろうか。

空港内の売店で買った日本酒を碑にそそぎ、キヤラメルと塩握り飯を供えた。石板の立ててあつた三角空穴に紙を剥いたキヤラメルを入れた。香を焚き御経をとなえていると蜜蜂がまとわりついてきた。供えた握り飯はそのまま昼食にした。

日本酒の香に寄る蜂よ魂となり秋野豊

を家族に連れよ

赤濁りどうどうと流れる雪解水の冷気を浴び、新緑もゆる山野をながめていると、浅黒い顔にトルコ帽の男性が通りかかった。ムスリムの男はひざまずいてお参りしてから峠を越えていった。

タジキスタンの人々は秋野豊を「ラストサムライ」と呼ぶ。ラフモン大統領は二千年七月六月に友好勲章を授けた。名を冠した秋野豊工科大学も創られている。

東日本大震災の時にはタジキスタンから一千万円の義援金が届けられた。中央アジアの最貧国であるタジキスタンにとっではたいそう高額なお金である。その金の多くが一般市民からの寄付であった。

帰路、ドシャンベに入る手前でガソリンスタンドに入った。目の前でバケツ入り四十リットルのガソリンを入れてもらう。見ていないと入れずにお金だけ取られることがあるのだそうだ。汚れた車でドシャンベの町中を走ると罰金を取られるので洗車してもらった。道端にまっていた子どもたちの仕事であった。

## 帰国

七泊八日の旅は体調を崩すこともなく無事に終えた。関西国際空港のリムジンバスの中で、ベビーカーに乗った生後一年くらいの赤児が手足をばたつかせおもちやのガラガラを振り回していた。元気な姿を見てほほえましく嬉しくてつい見つめてしまった。タジキスタンで出会った子どもたちの姿を思い出した。

### 参考資料

秋野豊博士が殉職した山岳の国  
国際派日本人養成講座

人物探訪 秋野豊さん

ウイキペディア タジキスタン